慶長以来 新刀辨疑

五

畿内　東海道

粟田口近江守忠綱

粟田口近江守忠綱

忠綱ハ播磨國姫路の人京師粟田口の傳ありて粟田口と称す一竿子が父也後大坂に住し近江大掾と銘す後に近江守と切る此作地鉄細に能しく丁子乱の上手や丁子の揉様は後雪色なるに似て大和

九峯
粟田口近江守忠綱
ウラ
彫物同作
九峯
一竿子粟田口忠綱
彫同作
元禄五年八月日
指表倶利伽羅 裏香箸樋
大亀文刃
大亀文刃長二尺二寸二分
九峯
一竿子粟田口忠綱
彫同作
元禄十六年二月日
表登龍
粟田口近江守藤原忠綱
刃長二尺二寸五分
大亀文彫龍の如し
元禄十年二月日
彫同作

新刀辨疑
巻五
二
水青舎蔵
反
格好共
二勝レタル
薙刀ナル故
全躰ヲ圖ス
雲ノ素
地鉄助廣ノ出来物ノ如ク強クシテ
小錵多ク白至テフカシ
穴ヨリ末長八寸五分 丸峯
元禄十三年八月吉日
粟田口一竿子忠綱
丸峯ニシテ高カラズ
粟田口近江守忠綱 彫同作
刄長二尺三寸八分余
元禄十三年二月日
新刀辨疑
巻五
三
水青舎蔵

忠綱ハ摂州大坂の住人粟田口近江守の二代萬右衛門と云初ハ近江守忠綱と切父と銘紛ハしけれバ後ニハ粟田口の二字を加て切る也此作地鉄細ニ丁子乱文能揃ひて白ひ深く匂ひ出来多し後一竿子と切し比ハ大丁子ぶりやゝふしさく丁子の小足を匂ひとて様を重ぬの如く御地肖乱文あり此乱文を世ニ鑓金信と云彫物あるニ紛らハしたる様多し直刃ハ別て出来物多し此彫ハ一流ありて鎖強くぜんぶ雲と勢ひあり彫ハ後藤祐乗上ハ彫の手を着て見るべきものとも云茎ハ鑢ハ伸て帽子丸く生れすれ少しさがる心あり兆後宝永正徳の比造りしハ深地鉄強くさげる物有

一書ニ一竿子ニ兼庭の家号ありと云按ニ彫庭の比ハ初代忠綱ハ中年の頃なるべし一竿子ハ延宝天和貞享元禄宝永正徳の作多し同書ニ北村万大夫と記せり初代の評ニ盡す

新刃銘尽 巻五
十四
粟田口近江守忠綱
小肉アリ
九峯
粟田口近江守忠綱
両人ノ作ニテ直刃至テ強シ
摂州住藤原長綱
摂州住藤原忠行
小肉アリ
刃長二尺二寸七分
中直刃
角峯
丹波守吉道
角ム子
大坂初代
十五

角峯
丹波守吉道
刄長二尺三寸
角ム子
丹波守吉道
刄長二尺三寸六分
丹波守吉道
角峯丁子亀文強シ
刄長二尺八寸四分大和丹波両初代
大和守吉道
角ム子
丹波守吉道
三品丹波守吉道
平作り重子厚シ
大坂二代目
ウラ
延寶三年二月吉日
角峯
刄長一尺三分
丹波守吉道
ウラ
元禄二年二月日
二代目
角峯
丹波守吉道

角ム子
ハタレ刃
丹波守吉道
大坂二代目也

吉道ハ大坂の住人丹波守の初代也世々祖父丹波に劣らず地鉄細か
なる強く小錵叢錵有て匂ひ深く平生未古雅にして艶ひ有又焼
刃ハ世に花美なる事といふ程の上手古今一人也降く下りや本寺
ハ新刀の手要なれども撰び用ゆべし角峯平横鑢ハ大筋違なり
出し摺出しの所まで其の所太すじ違すべし何れ書ども一寸斗
下庫有りて心を専に錆々あれ共中心ハ角峯の面取おし有也
一書に丹波守大和守兄弟の祖ハ美濃國関の住和泉守兼定か末葉
也此人和泉守播磨に来住し又京師に移居し元和の比攝州大坂へ
来る即初代丹波守也弟も同所に住すと云按に丹波守の

銘を見るに京とも大坂とも定め難き銘多くあり是れを以て是を観
まさむ一書の説のごとく一人にして變歷せし者と見へたり然れば丹
波守と吉道は兄弟なりと云説は恐らくは非ならん是二代丹
波守の兄弟なるべし
二代目丹波守は君の作柄を以て厥時考ふ實は三代目也丹の字父の
ごとく廣からず地鉄細にて匂ひ深く多くはすぐれ華やか也金紋に
して亀文刃に類る所は刃の中へ吟気を強し模様にてすでに
及ばざる程能出来たる見事なる物なり地の内へ玉を刄に入れ
極りなし中心は父と同しく丹方厚し後年に吉丹波守と中丹波など
唱ふると書して三代目なるを漏せり三代目の作も父に劣らず
儔る上手也中心は祖父に似て丹方厚く銘すくなきなり

角帽子

大和守吉道

角ム子

大和守吉道

刃長二尺二寸三分

丁子亀文

萬治三年八月吉日

角ム子

大和守吉道

ウラニ

萬治巳亥二年八月吉日

吉道ハ大坂大和守の初代ニ當り寛文の比の作ニ地ハ
鐵細ニ錵あり互割きすと云へりミだれ丁子乱又ハ重花の如く又ハ三本杉
の中ニ焼出ス大坂中河内國助同人ハ新刀の一流なりとも云ふべき物也

心角峯銘平鑢又ハ目の所広く倒し鑢ハ筋違ひにし いかにも手ぎはよく
其目能く立たり又佐助伊賀守法城寺との定俗世の賞翫とハ云へども大ニ劣れり
一書ニ初代丹波守吉道弟大和守吉道ニ弟子上野守吉國ニ弟子上野
守吉道ハ森下孫兵衛と云ふ子上野守吉房森下二太夫と云ふ小大坂
ニ一人大和守者上野守吉國弟子ニ吉田四郎兵衛と云ふ其弟子に吉行吉
平者と云接又大坂の大和守世々二代目と云後集ニ見ニ京和四郎
兵衛後傳兵衛と改し銘二代目と云能く又上野守が弟子
といふ者信用すへし為ニ二代目の大和守父ニ劣れり後吉國ニ
家業を学びし者にて弟子也といふ可然二代目大和守ハ名人にして
吉國同時ニ中年の人也いかんで吉國が門人ならんや又上野守吉國
吉國二代目を吉道と記し三代目を吉房と記せり誰か知る人に尋べ
候わし三代目の大和守ハ吉國が弟又弟子ならんと思ふ也しかれども

大和守吉道
中心長九寸 丁子乱文 刄長二尺八寸三分
延寶三年十二月吉日 嶋津重勝所持
大和守吉道
角ムネ
三品大和守吉道
刄長一尺六寸四分
刄ノ中菊櫻日月星ノモヤウ冨士ノ二字アリ珍刀ト云ヘシ
延寶三年二月吉日
主生國駿州安倍府中
吉道ハ大坂大和守の二代目にて富四郎と云後傳右衛門と改む錦町に
住す大銘を切て守の字父か作より重長し其作地鉄細に白く
簾刄丁子簾芳野川龍田川いろいろの模様鮮にして比すへき処
なし其作を世に呼名て
二代目丹波守と同作も有之
一書の親父の評に委し
角峯
大和守吉道
二代目ナルヘシ
角ムネ
大和守吉道
大坂大和守ノ三代目
大和守吉道二三代の評勝ず三代の中後集に論なし初代二代
ハ世に知る所也三代目ハ地鉄細に白く深く簾刄丁子菊など刄多く

有ても上工夫有之故是とも父祖ニおとれり銘初代ニ似てたゞ筋
初代より字細く添しけんの仕立ニ祖代ニ似たる

直道ハ摂州大坂の住人初代丹波守吉道ヵ弟子丹後守藤原直道ト
切又三品丹後守とも銘す後ハ兼道と改む此作地鉄細ク強く大乱
又大濤乱又丁子乱又いろ／＼の模様有何れも銘旬添へ添て丹
波守同位の上手也指表ニ菊一を切初代とす

一書ニ直道ハ濃州関和泉守兼定ヵ末也丹後守吉道元和の比京
より大坂へ来二代三品丹後守ト号大坂ニ住す三品吉兵衛ト云二代
目ハ吉兵衛弟子三品丹後守兼道と切養子ニ治三郎ト云の但馬
守兼光ヵ父也摂ニ丹後守兼道と切しよみすとハつけり初代
丹波守吉道同時ニ大坂ニ来りしなん三品と号するとハて又本ハ初
代丹波守ヵ弟子也

角峯
丹後守兼道

兼道ノ二代目ハ後江戸ニ住す九平治或ハ喜平治と名乗ニ見へたり
其いつれカ是なるや此作丁子亀文ハ初代ニ劣らす大亀文ハ上手也
稲葉丸と切しも此作なるべし

國助ハ大坂河内守の初代也堀川國廣ノ門人にて中河内ハ二代也
一書國廣ノ門人國友ノ子和泉守國貞大坂ニ住す國貞ノ子河内守
國助と云掛ノ國貞の初代國助の初代ニ而人共ニ國廣ノ門人なる事
明白也古の高作も國助ハ國貞ノ子なる時ハ表ニ國貞裏ニ國助
兼銘を切し却て又其後國助ハ國貞より八十年と見へ
たり

新刃銘尽 巻五
角峯
小林河内守国助
刃長二尺三寸三分丁子亀文匂深し
延寶三年二月吉日
角峯ヤスリ斯ノ如シ刃長二尺三寸八分丁子亀文大アレニテ
河内守国助
角峯鑢右ニ同 刃長二尺五寸八分横手下ハ大丁子
河内守国助
角峯
河内守国助
中河内初代大和守両作
丁子刃
大和守吉道
中心長八寸三分
河内守国助
角峯
河内守国助
刃長一尺五寸五分

角ム子
武蔵守國次
大亀文國輝ノ如シ
角峯
小林武蔵守國次
武蔵守國次ハ初代國幽ガ二男ニテ中河内ガ弟肥後守國康伊勢守國輝ガ兄也
定而名高キ能鍛冶なれバ伊勢守國輝ニ似タリ
作ハ兄弟の中ニて上地鉄せんぐりと大亀文多し肥後守國康と似
國次ハ名作なれども少し書高名
角峯
肥後守國康
刃長二尺八寸六分 重花亀文
角峯
肥後守國康
ウラ
○以南蛮鐵作
國康ハ名國次ガ弟國輝ガ兄也此作地鉄ニて細に強く匂ひ深くて
子丑の名人中河内同様の作也能出来ては初代大和守吉道ニ似
たり銘まぎらはしも國幽一家の事子の事を以て知べし子ハ多かる故
あり
小肉
小林集ッ進國輝
國英トモ切也
小肉
スリ上残二尺守一分 大亀文
○小林伊勢守國輝
ウラ
寛文十二壬子霜月日

小林伊勢守國輝
小内
ウラ
寛文十三年八月日
小林伊勢守國輝
小内
刃長二尺二寸六分
延宝八年二月日
小林伊勢守國輝
ウラ
延宝三年二月日
伊勢守國輝
中直刃白深し
上り龍下り龍ノ彫両面ニ有
龍ノ上両面梵字也
元禄十二年八月日
長サ二尺二寸七分
配
伊勢守國輝
刃長二尺四寸二分
細直刃
寛永四丁亥年仲春吉日

林伊勢守國輝

銘 長九寸三分両鎬ニテ廣直刄中心ノ長一尺三寸五分 ○

國輝ハ大坂初代國助ヵ四男ニて中河内守ヵ弟也小林ト稱し進國英とも切テ後ニ伊勢大掾ニ後ハ小林伊勢守國輝ト斗リ切也萬治寛文延寶天和貞享比之地鉄細ニ强ク蕩て荒錵小錵多く匂ひ至て深く大亀文大濤乱刄又いたれも砂やゝ出来有りし寛永正徳比之後の作ハ性力裏ふるまの地鉄の錵至て目立ちとのみ鏡せしく上至作物ありて雅し帽子能志まり匂ひまて掲ヘ助廣の切先ニ似たり一書ニ小林出羽大掾藤原國輝と云又云子孫中伊勢松山住と云の助ニ孫原國輝と切し者すごありそれは輝政ヵ子なる者也

左陸奥守ハ子也とも又弟子なりともいふ初ハ包重と切後包保と云銘ニ切る世ニ云陸奥守と賞美する物ハ此包重と云陸奥包保とハ別人ニし鍛錬の趣意違ふ不知者包重を鍛多き故能知る者不可有し

刃長二尺八寸七分

大亀文

延寶七起八月吉日

越後守包貞

小二ノ

越後守包貞

小肉アリ

言之進若年ノ銘

角峯　二尺五寸二分

越後守包貞

越後守包貞
ウラ 天和二年十二月吉日
小肉
坂倉言之進照包
刃長二尺二寸九分 中縵理
天和二年八月日
大湾ニアレ配リテ見事ナリ
小肉
坂倉言之進照包
刃長二尺二寸七分
坂倉言之進照包
小肉
刃長二尺二寸一分 大亀文小アレノ方也
天和二年二月日
小肉
坂倉言之進照包
刃長一尺六寸三分 大乱文強シ
天和二年八月日

坂倉言之進照包

天和二年八月日

刃長一尺六寸七分

包貞ハ摂州大坂の住人越後守と云し作地鉄至て細に総白ひ有て丁子
刃大乱又互の目いつれも刃深く切物也
照包ハ後集ニ越後守が弟子まで後者と云 二代目ハ越後守包貞
と切延宝の末より坂倉言之進照包と切と云按ニ初ハ越後守と切
後ハ言之進と切ある後の違ひ格別詳ならん此作地鉄至て細に能
刃荒錵小錵多く白ひ深し初越後守と切し比ハ丁子交乱又互の目
しても乱文出錵の如く大和守河内守ニハ劣り坂倉言之進と切し大乱文
ハ津田助廣より大様なりまで花やか来手の?屋の?の?進

何れも匂ひ深く津田助廣に欠ぬ所のものなり其長以来至て美事なり此
照包ハ度々作有所すくなからず包津田又ハ初代忠綱助直の次に出べ
き物也

一書に大和國手掻の末葉大坂住中川陸奥守包康が弟子越後守
包貞山田本之助と云弟子包光包次五人有又伊賀守包道が弟子
又越後守包貞有山田平太夫と称す平子黒松とよふ同名三代有
後集又二代目の越後守包貞ハ初代包貞の弟子と記せり照包坂
倉言之進とぞ改めとセしも非也坂倉言之進ハ関の照門か末まで
大坂に住すと云り按又一書ハ聞書にして既に國儔を國寿とし
包保ヲ包康に作るがごとし其照包を初代の弟子するあり代伊賀
守包道が門人山田平太夫と云者也お(?)に一人越後守包貞有照包ハ
関の照門か末なりと書せしハ照の一字を以て見坂倉又関の称有りし

なお斬記せしなるべし然れども既に坂倉越後守照包と切たる指表なれハ
二代目越後守包貞後言之進照包と改しなる疑なかるべし表の方越後守
と切裏ニ坂倉言之進源照包と初の銘後の銘切たる刀あり又三
代目に二代目とすべし違との無作なるや延宝七年の包貞と無作
の包貞と正しく同人と見ゆ又坂倉越後守と切たるも同人と見ゆ左里初
代初ハ山田本ニと号父山田平太夫と云者なり小田ハげなる朝なる里

信吉ハ摂州大坂内本町ニ住す高井越前守源来信吉と切此作延宝
ノ末より元禄比の者也地鉄細かに沸白くして直刃湾ハ出来良し写し
亀文ハ津田助広ニ似て造り至て実に手利と云へし二ツ胴とも銘を一
致無之作る所也

一書ニ山城国の住人高井越前守源来信吉兼治寛文の比也兼定と
切又信濃守信吉ハ初代兵庫と切二代目ハ蔀家と切初代信吉ニ七
ツ胴落の刀有二三井金三郎と称す越前守ハ初代信濃守か弟也信
濃守信吉も初代の子にて京師ニも大坂ニも住す本より来と云 相模
守信吉も来と出と称す又元祖信吉隠居偏信入道源来信吉とも
寛文中八十五歳まて造れる者也宝永中阿波守おも模せしとも切
しかる後に越前無二人此ニ本より出と云ハ不審也後来まてハ
京信吉か弟豊後守国兼ハ十三才越前守か紀也

角峯

常陸大掾宗重

角峯 大亀文砂流地金ツマリテ見ゴト也 二本共ニ初代ナリ

常陸守宗重

宗重ハ摂州大坂常盤町ニ住す関金重か末葉也此作地鉄細かに業銘
小銘多く白みて深し湾直刃大亀文何れも花やか出来物多し刃物に
造りても深見遠くあり肌あらく沸く出来たる物は善とす常陸大掾と切
て後ハ常陸守と切也多田宇兵衛と称ス二代目も同銘也後江戸に住

一書ニ初代宗重ハ津田越前守助広か門人と云二代目多田常陸
守宗重と切三代目宗貞ハ豫州松山に住又大坂宗重と年号切銘

此者ハ常盤町ニ住す寛文の比也と云筆擬ニ常陸守二字銘ニ宗重
さだかならぬも切しあるべし同時代同町ニ同銘の者有紀平ニあり
ず二代目宗重ハ後藤重之も切しあり

一角小肉アリ

花房備前守源祐國

刄長一尺八寸一分

花房備前守源祐國

祐國ハ生國紀州ニて石堂の一派也後ハ摂州大坂ニ住す初の銘ハ
紀伊國祐國又ハ名をてきいのくにすけくにと切しも有後大坂ニ
てハ備前守源祐國と切花房備前守とも切也其作地鉄細ニ能出来有り

麗なるあり銘小銘多く自然し後集又津田助廣ニ似たりと也兼文ハ
南紀重國ニ兼又刄小鎺て直刄ハ初代忠行ニ似たり

一寸肉

陸奥守橘為康

落

刄長二尺三寸一分

備中守橘康廣

為康ハ紀伊國石堂の嫡家冨田六郎左衛門と号し後ハ摂州大坂ニ
住す先祖ハ備前一文字の助長と云治工明應中近江國蒲生郡里
大子寺基石塔寺の門前ニ来住す故石塔石堂或ハ石道とも称し助長
ニ来紀州和哥山ニ来り又紀伊國石堂とも称す後紀伊國康廣又備中守共

攝津住藤原國幸
九ム子
帽子ツヨク鎬多ク白深し地金サラリト出来タリ
刃長二尺三寸一分
國幸攝州大坂或ハ尼崎又住す堀川國廣カつ人也地鉄の疵能國廣ニ似たり保二代目の國路同作の作あるか
多田次兵衛尉貞行
小肉中 亀文
貞行ハ攝州大坂の住人也後集ニ攝州を出きて緑あるかの也あり一刀ハ地鉄細ニ肌鎬小鎬ありて白深し大亀文ありして初代宗重ニ似たり常陸守宗重も多田宗重と称し疑ふらくも一類なるか貞行ハ其後のつ人ある守カいの仕立能其後ニ似たり
丹羽相摸守源則廣
角ム子
常陸守宗重ニ似タリ
則廣ハ紀州より大坂へ来住す住吉團ハ一と云上手也詳後集ニ評せり
河内守源康永
角峯
康永ハ備中守橘康廣カつ人ニて長幸カ師也此作康廣為康ニまさるとも上手也銘形中心の仕立つ人ニ似たり
多々良氏長幸
角峯 小亀文白深尤手也

長幸ハ摂州住人ニて寛永の比也備前兼光の上手初代横山上野
大掾ト又銘セしとある備前法之摂州の鉄色ハ白く見ゆる所あり
論作も横山祐定より八上手なり

摂州住國光

小肉アリ

國光ハ地鉄細ニ白ク丁子乱文肥後守國康ニ似タリ是モ上作
一書ニ河内守國助ノ子肥後守國康ノ弟武蔵守國光小林八郎左衛門
とあると按ニ國次ノ初銘なるべし又ニ肥後守ノ弟武蔵守と記し後集
ニハ次男國次三男國康四男國輝と見へたり何れの是なる哉

角なか子

武蔵守永道

刃長一尺七寸五分 中亀文強

永道ハ摂州大坂の住人也此作地鉄強く荒錵多し出羽守秀辰ニ
似たり上手也

小肉アリ

池田鬼神丸國重

丁子ニ鬼神丸ハ備中水田國重摂州ニ来て池田鬼神丸と銘す
と云按ニ水田より来て河内守國助ノ門人なるべし作ハ前集ニ委し

角峯キリ 鑢子 刃長一尺八寸 細直刃

播州親子廣高

廣高廣重ハ父子ナルベシ

播州の氏繁同信の作と見へたり
小錵白深し上手なり

同 古狐丸廣重

九ム子

越前和泉守廣高

廣高ハ後集の河内守廣高の二代目也右遷つゝ子孫をとし地鉄末
の二王の如く出来小銘ハ上手也初代廣高ハ大坂ニ在り廣高も父
同住と見へたり

但馬守宗次寶暦の比の鍛冶ニて弱き作なりし上手とハあらじ

球吉郎光雄ハ亀文出来し龍名子同住の弟也

○東海道

乞峯

○陸奥守藤原歳長

歳長ハ先祖相州鎌倉傳長谷郡の末流ニ村廣次京堀川ニ住し大坂
へ下り後又阿波徳島へ下る子孫波地ニ栄ふ阿波國徳島住ニ村歳
藏守家長と改め者又阿波國徳島住安宅住ニ村石只吉同比播守
同陸奥守國左近代の銘皆一ツ也べし陸奥守ハ兄山城守阿波より
京都へ上り又江戸へ下り後白銀丁ハ其新堀日影町ニ住す二代目
ハ新銘代浪華長と切吉兼ト云陸奥守ハ京師ニ住し後勢州安濃
津へ移住すと作地鉄細かく小銘自由深く沸出来大乱文も有刃文極め
能く住吉ハ心もく随鎖代ヨリ大事也実ニ上品ニ也

一書ニ曰二村孫之吉兵衛と切しハ此家系の若手の銘あり

角ハ肉

前伯州信高入道
山月居士

表銘ハ　無二すゝ三

前伯州山月信高入道

九筆ニノギ高シ

伯耆守藤原信高

二代目ナリ

一書ニ信高ハ濃州関ニ而孫ニ来歴ニ誤年ニ伯州入道閑遊ハ信高の父祖ニて寛文四年六十四歳ニて死す二代目ハ山月居士ニ代目ゟ

伯耆守四代も同銘ニして出雲ニ称す代々家督を継ぐものハ信高と切る云按ニ三代迄ハ同位の上手ニて四代よりハ作も及ずといへど何ずれも上手と云れける元祖閑遊と銘するも未だ及ばず

尾州住藤原貞収

貞弘ハ両集ニ不漏しが若気の廣がし銘するをもや雷鍛ども上出来及ばず

尾陽住来国治

ウラ　以諸叉鐵作之

国治ハ尾州の鍛冶ニて江都へも来り正徳享保の頃の鍛冶也情の家ニて銘も美しく世に鍛久の評のごとく上手也

長曾祢興里
小肉
刃長一尺三寸
五如圖
延寳五年二月吉祥日
住東叡山忍岡邊
長曾祢興里作
小肉
刃長一尺七寸四分
長曾祢虎徹入道興里
角ムネ子キリヤスリ
ウラ
試ノゾウガンアリ 小乱刃長二尺三寸二分
長曾祢興里入道虎徹
小肉
ウラ
寛文九年二月吉日
長曾祢興里入道虎徹

「小肉アリ
越後守草下夫村加卜作之
ウラ
真十五枚甲伏作
「角ム子小肉
源頼貞
武門服目眞鍛作之
「角ム子
帝激ノ不出来ナルカ如シ
上総介藤原兼重
小肉
裏ニタメシノ象眼アリ
上総守藤原兼重
刃長一尺七寸七分
丸ム子
守藤原弘包
二代目也父ニハ劣
カク峯
出雲守藤原吉武
二代目ナルベシ
丸ム子
於南蛮
源義助南蛮鉄
「ウラ
益雪
延宝二
小反
宇多國宗作
牛込浄瑠理坂ニ住ス又云芝宇田川町ニ住ス

大和守安定
ウラ　万治三年十二月

武州住安利
丸ム子
万治二年十二月日

安利ハ為集ニ漏タリ地鉄細カニ小錵出匂白ミ有テ安定同手の上手也
大亀文出ル業物也業ハ安定ニおとらん

康継以南蛮鐵
ウラ　於武州江戸作之

何代目なるか未ダ詳ならず上手也

摂津守源忠行
角小肉中亀文三寸強し
下一尺ヽ寸
下八寸五分

武蔵住藤原国保
ム子角
ウラ　貞享二年五月吉日　中ソリ大亀文

忠行ハ大坂初代忠綱カ弟子也し太郎左衛門忠行ト云家号左衛門ト云
江府ニ下向す[illegible]左衛門ト云[illegible]銘[illegible]上手也
國保ハ和州手掻の末まて地鉄細カニ強く亀文多し上工也出羽守武
蔵住と同人也前集ニ別人と書せり
丸ム子

松齋篤作
ウラ○正徳元辛卯年

一書ニ云松舟ハ戸川玄蕃頭安貞ニ鍛ハしむるの銘也自身の銘ハ達富
と切又云小笠原昌御隠国正舟此松舟ハ別人也昌秀ハ茨城長の作也
按ニ小笠原長昌慶長よりハあるくすべし寛治寛文の作と云人あり
松舟ハ正徳の比なる故長昌ニハあるべし戸川氏歴の作ふ
るべし

國重入道して一虎と号し嫡子を國重と云手あり諸吉賀ヶ末流也
父子共ニ江都ニ住す餘の上手也

於東叡山麓藤原國吉
東武住藤原國住
角ム子
武州住藤原是一造之
角小メントリ
ウラ
寛延三年
庚午二月吉日
角峯
明和中ノ作ハ此ノ如ク切
於武州霞關邊保則造
常陸守宗重
角ム子

角ム子

石見守國助

大坂初代國助弟子小林源之丞伊賀守家住して江戸に住す
大坂の部に出し

角峯

貞享二年十二月吉日

上州於前橋源吉信作之

ウラ

天和三癸亥年八月吉日

上野國前橋住吉信ハ大坂大和守吉道か弟子三木小右衛門吉廣か子小右衛門吉信と云書に記せり二代目大和守吉房と似たり勝れて上手あり

新刀辨疑巻之五終